

「うわさ」はどこまで扱えるか

東京都 中央大学杉並高等学校 生田研一郎

学習指導要領では「情報の特徴とメディアの意味を理解させる」ことや「情報の受信及び発信時に配慮すべき事項を理解させる」ことが求められている。一方、生徒たちはLINEやTwitterを日常的に使っており様々な情報に接している。チェーンメールやデマの拡散に対して注意を促すといった生活指導的なアプローチだけでなく、「うわさ」の論理的な理解が必要だと考える。本発表では授業で扱った「うわさ」の論理的側面の紹介と授業の展開を模索する。

1. はじめに

1.1 授業の目標

情報科の授業に対する自分の基本的座視は「親学問や実社会と接続するように、情報社会の基礎知識や基礎技術の涵養を目指す」である。

「うわさ」をいわゆる生活指導的に扱うことは必要であろうが、親学問を意識した授業をしなければ、それこそ生活指導の域を出ず教科の学習とはならない。

そこで「うわさ」に関する親学問(社会情報学)を意識した授業を実践し、うわさとの付き合い方を論理的に理解させることを目標とした。

1.2 授業配当

本校では「社会と情報」を第2学年に2単位設置している。2年生1学期にいわゆる情報社会の光と影といった授業の後、「コミュニケーション」や「うわさ」、「メディアの効果研究」についての授業を行った。本講演では1コマで扱った「うわさ」に関する授業を抄録する。

2. 授業

2.1 「うわさ」の3つの側面

「うわさ」に関する概略として以下の3つの側面に触れることから授業を開始した。

典型的な『社会情報』

個人的な口コミで伝達される

『コミュニケーション行動』

人々の社会的なつながりによる

『集团的・群衆的な社会現象』

概略を最初に紹介することで、授業内容の今後をイメージしやすくなると考えて実践したが、結論としては導入にはあまり適さないと感じた。

その決定的な理由は、そもそも「うわさ」を論理的に扱うということ自体が高校生にとって唐突過ぎるからだ。

解決案としては

(ア) 基礎情報学を踏まえた『情報』の授業を展開した後に取り扱う

(イ) ~ に関する授業を任意に展開し、展開した授業との関連性を取り扱う

(ウ) そもそも「うわさ」だけで授業を展開するがすぐに想定できるが、今後の授業で可能性を探ることとする。

2.2 「うわさ」の定義

「うわさ」を知らない高校生は皆無であろうが、生徒が知っているという前提で授業を進めると理解が曖昧になる可能性が高い。そこでタモツ・シブタニによる「うわさ」の定義を紹介するところから始めた。

「うわさ」の定義

曖昧な状況に巻き込まれた人々が、自分たちの知恵を寄せ集め、その状況についての有意味な解釈を行おうとするコミュニケーション

タモツ・シブタニ / 1985

定義を扱っておけば授業の様々な場面で「うわさ」を丁寧に扱うことが可能になると考える。

2.3 「うわさ」の発生

シブタニの定義によると状況の曖昧さが「うわさ」発生の必要条件である。そこでオルポート・ポストマンによる「うわさ」の公式を紹介した。

「うわさ」の公式

$$R \sim Z \times A$$

R : 「うわさ」の強さや流通量

I : 当事者に対する問題の重要さ

A : 当事者のおかれた状況の曖昧さ

オルポート・ポストマン / 1947 見出し 2

これは、当事者にとって重要な問題であっても状況が明確であれば「うわさ」は流れないし、状況が曖昧であっても当事者にとって無関係な問題であれば「うわさ」は流れないということを意味している。ここでは学校で流れたことのある「うわさ」を例に説明した。

「うわさ」を生む人々の意識や心理については以下の2つを紹介した。

1つ目は、情報の空白を埋める試みとしての「うわさ」の発生である。(図1)

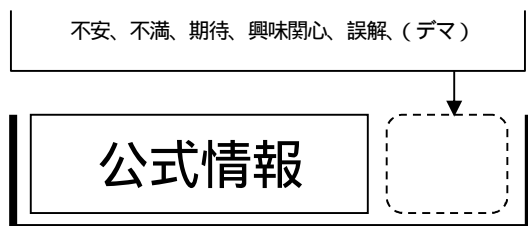


図1 情報の空白を埋める試みとしての「うわさ」

ここでは「うわさ」は真偽不明であり、「デマ」は偽情報であることを扱った。この2つを混同すると「うわさ」の理解が曖昧になると考える。

2つ目は、言いたいことが言えず抑圧されている感情が噴出する場合だ。この場合は

- 「・・・らしいよ」
- 「・・・と聞いたよ」
- 「・・・という話だよ」

のように、伝聞形式になる。責任を自身で取ることなく不確定な形でコミュニケーションを取ること、自身の感情を満たす形となる。

シブタニの定義によれば「うわさ」は有意味なコミュニケーションである。つまり、うわさには根拠(らしきもの)があることになる。ここでは「友達によると・・・」「友達の友達が・・・」といった人脈と言う情報源と、「テレビで専門家が・・・」「中の人から聞いたけど・・・」といった情報の権威付けを扱った。いずれの場合も「うわさ」の信頼性を上げるものとして振る舞う。

以下のものを「うわさ」発生のまとめとした。

- ・~~根も葉もない~~「うわさ」
- 「うわさ」の発生には理由がある
- ・~~火のないところに煙は立たない~~
- 火のないところにも煙は立つ

授業においては「うわさ」のことわざを否定しつつ「うわさ」発生のポイントを押さえる形となる。

2.4 「うわさ」の伝達と広がり

伝えたいと思わせる「うわさ」には以下の3つのポイントがある。

- 重要度
- 共感度(納得度)
- ネタ度

タモツ・シブタニの「うわさ」の定義を踏まえると上記 ~ は有意味なコミュニケーションであると同時に真実かどうかは関係ないことがわかる。

また、上記 ~ の要件を満たそうとすると、「うわさ」が以下のように歪んでいく。

- A 平均化(単純化されること)
- B 強調化(残された部分が強調されること)
- C 同化(興味関心や先入観、感情などに情報内容が統合的に変化すること)

「うわさ」は漠然と信じられて語られ、信じられるように変化する。このため、「うわさ」は真実性から捉えることはできない。むしろ、伝えたいと思わせるポイント(~)や歪み方(A~C)から捉えた方が良いと言えよう。

2.5 「うわさ」の消滅

「うわさ」も永遠に続くわけではなく消滅する。授業では2つの場合を紹介した。

一つ目は自然消滅である。人の噂も75日ということわざの通り、興味関心は変わるものであり、新しい「うわさ」がかつての「うわさ」を消し去っていく。

二つ目は正確な情報による説明である。新聞や公式サイトによる情報が情報の空白を埋めることになり、曖昧な状況が明らかになる場合である。これは「うわさ」の公式を用いても説明が可能である。

2.6 ネットメディアにおける「うわさ」

授業の終盤には「ネットがうわさの巣窟ではない」ことや「ネットメディアのうわさが短期集中型」であることを扱った。3.11の「コスモ石油千葉製油所デマ」が生徒に理解しやすい具体例だと実感している。

3. まとめにかえて

授業で「うわさ」を論理的に扱うことで、教員の感覚に頼った生活指導的な授業から脱する事が可能だと考える。生徒の実習を踏まえた授業構築が今後の課題である。

参考文献

- (1) 松田美佐:うわさとは何か 中央公論新社 (2014)